

教訓小説作家の本音：Susan Warnerの場合

北原 妙子

無名だった Susan Warner (1819-1885) の手による *The Wide, Wide World* という作品は、1850年に出版され、むこう10年間に、聖書、*Uncle Tom's Cabin* (1852)に次ぐ、ベストセラーとなった。¹ 当時の女性作家によくみられる理由だが、Warnerも又、生活のために筆をとった。だが、Harriet Beecher Stowe 同様、彼女は自分の作品が小説とみなされるよりは、教訓書の類と考えられることを好み、自身、作品を単に“stories”と呼んだと伝えられる。²

The Wide, Wide World では、一人の少女がみなしごとなるが、周囲の人々の導きもあり、立派なクリスチャンの女性に成長する過程が描かれている。この作品がよく読まれた理由を分析する際、Warnerが社会的に圧迫されている読者—それは主として中産階級の白人女性であったが—に、逆境に置かれながらそれに立ち向かうヒロイン、Ellen Montgomeryの姿を通し慰めや勇気を与えたこと、又、信仰の力を得て自分の置かれた困難な状況にいかん受け身に対処していくかを示したから、といった点が挙げられる。³ 実際、Warner自身、後年には自宅で陸軍士官学校の生徒を対象に毎週日曜学校を開き、神の道に生きた模範的なクリスチャンであり、*The Wide, Wide World*以外にも教訓調の諸作品を残し、「教訓書の作者」という堅苦しいイメージにあまりにもよく当てはまった人物に見られがちである。だが作品を細かく検討すると、そうした読者、特に女性読者を導いた、聖人君子的教訓小説作家以外の面も見られるように思われる。そこで本稿では、そうした作者の既存のイメージ以外の側面に着目しながら代表作の *The Wide, Wide World* を考察したい。

I

Warnerは *The Wide, Wide World* を書くにあたり、実人生に取材している部分が多いが、その一番の典型は、おそらく、作品冒頭でヒロインの父が訴訟に負けたという件であろう。作者は著名な弁護士を父に持ち、9歳の時に母を亡くしたとはいえ、父方の叔母に母代わりをしてもらい、妹 Anna と共にニューヨーク市で裕福な生活を送った。しかし1837年、Warner 18歳の時に、恐慌で父が破産した後は、一家は経済的困窮に悩まされるようになる。ニューヨーク市にある邸宅、家財を売り払い、一家はハドソン川を遡りウェストポイントにある Constitution Island という川中島に移り住む。だが、父は、その近くの土地の排水をめぐる裁判沙汰に巻き込まれ敗訴、一家は一層貧しくなっていく。贅沢だった Warner 姉妹も、質素な生活を余

儀なくされ、ついに1848年、家計が逼迫し、又、叔母の勧めもあり、Warnerは筆を取るに至った。そして生まれた作品のヒロイン、薄幸のエレンの姿に、作者自身の姿を重ねてみることは難くない。

物語の中で、ニューヨークに居た頃エレンは、多岐に渡る学科を勉強していたことが記されている。Fortune 伯母の元で学校に通えないなら独学で勉強を続けようと思いつところだが、その場面ではフランス語、英語、歴史、算数、地理の教科書をエレンが取り出す。⁴ その他にも、本人はイタリア語、ラテン語、音楽、化学、生物を勉強したいと伯母に告げている。一方、伯母が“it doesn't do for women to be bookworms.” (140) と馬鹿にするように、エレンは家事、手仕事では無能ぶりを披露し、皿洗いやベットメイキングのやり方から教えなければならない有り様である。とはいえ、これは作者の少女時代を写したものだといえる。Warnerの父は弁護士そして不動産投機家として成功していたので、流行の邸へと次々移り住み、子供達には家庭教師をつけて先のような教養を身につけさせた。召使いがいたので、子供達は家事や身の周りのことに煩わされる必要もなかった。少女時代の1830年代、Warner姉妹は、ニューヨーク郊外、Canaanにある祖父が建て、父も育った大きな農家で幾夏かを祖父と過ごした。Canaanは本質的にニューイングランドの村であり、この地が後、*The Wide, Wide World* をや他の作品の舞台となるわけだが、⁵ 子供の頃Susanは夏の田舎の訪問を好まなかったという。妹に語ったところによると：

past the many, many stacks of boards and lumber piled along the wharves, poor-looking men, and poor-looking boys, and sad-looking dwelling places—Oh the city,—and the suburbs of the city—they are not pleasant, Annie. I felt as I walked slowly up Broadway that I had left the best part of the world behind me.⁶

少女時代よりWarnerは読書家で、田舎に行った折も本の世界に閉じこもりがちであった。自然よりも空想の世界を、そして、都会での社交生活の方を好んだのであり、1841年の祖父の死後、姉妹はもはやCanaanを訪れなくなった。

このような体験は*The Wide, Wide World*の序盤、エレンの生活環境の変化に見出される。ニューヨーク市でのホテル住まいで母の加減が悪いということ以外特に目立った不満のない、むしろ、母と二人きりで存分な愛情を注がれ、強い絆で結ばれたエレンは幸せな日々を送っているといえる。だが、母の病気に加え、父の敗訴のために、両親はヨーロッパへ引っ越さねばならなくなる。この突然の不可抗力によりエレンはニューヨークから遥か離れた山のふもとにあるニューイングランドの田舎町に、父方の伯母と暮らすために、大変不本意ながら送られる。この都市から田舎への移動については、エレンの母の“You have never lived in the country; I think you will enjoy it very much.” (22) という楽観的勧め、そして“a very pleasant place” “the country is beautiful, and very healthy, and full of charming walks and rides.” (22) という父の宣伝にもかかわらず、エレンは当初田舎暮らしを好まない。確かに自然は美しい

が、朝起きて戸外で洗顔しなくてはいけない不便、油断すれば溝に落ち服を汚すし、白いしゃれた都会的な靴下は非実用的、汚れが目立つとして伯母に灰色に染められてしまい、エレンのそれまでの生活とは全く勝手が異なってくる。加えて、その住人にもなかなか馴染めない。まず伯母の Fortune Emerson は粗野で厳しいし、出入りの農夫 Van Brunt は親切であるにもかかわらずその口下手故にヒロインに人柄の良さが伝わらず、例えば使用人なのに食事を同席することをエレンに快く思われなかったりする。ここには、エレンの「お上品な」中産階級的意識と関連して、都会っ子が初めて田舎を訪れた際に見られる、一種のカルチャー・ショックが描かれており、エレンの異文化不適應の様子が示される。同時に、これは作者の実体験に基づくと考えられ、子供時代、作者がいかに田舎の生活に順応できなかったかが伺える。田舎嫌い、特にニューイングランドの田舎とそこに住む人々への偏見は後に和らぎはするが、完全に消え去るものでもなかった、と Warner の研究書で Edward Halsey Foster は指摘している。⁷

しかしながら、作品を読む限りエレンの田舎に対する始めの嫌悪感には好感に取って変わられる印象がある。顕著な例はスコットランドへ行った後に見られる。新たな保護者の Lindsay 家は貴族の末裔であり、その暮らしぶりは贅沢で、家事から解放され家庭教師に勉強を習うといったエレンの好きだったはずの生活が再び繰り広げられる。加えてエディンバラ市内をドライブすればアメリカにはないような歴史的建築物を眺める楽しみもできた。新しい家族はエレンをペットのように可愛がる。こうしてみるとエレンは一度失ったものを再び手に入れたと考えられる。それらは都会での「お上品な」生活、家族、物質的豊かさ、愛情といったものだ。だが意外なことに、エレンはエディンバラでの生活よりも夏の間過ごす、the Braes というリンゼイ家の別荘での生活が好きだった。というのも、その地が、Fortune 伯母達と暮らした Carra-Carra を思い起こさせるからだ。Warner は次の様に書いている。“Ellen liked it there [the Braes] much better than in the city; there was more that reminded her of old times.” (555) 又、作品結末部分で作者が暗示しているように、エレンは外国での貴族的な生活ではなく、アメリカの Humphreys 家の元へ戻ることを選ぶ。どこにとは明示されていないが、おそらく、Carra-Carra 村かその周辺、つまり、アメリカの田舎に進んで帰るのである。都市が発達したヨーロッパ全体を都会とみなすならば、1850年には依然農業国であったアメリカは田舎と考えられ、この意味でも、エレンは田舎を永住の地として選んでいるわけであり、もはや、都市生活、都会への未練・愛着がなくなったように思われる。

この変化は何を意味するのだろうか？まず考えられることとして、エレンは Carra-Carra 村で牧師の Humphreys 一家に出会い、第二の家庭ができたから、つまりハンフリー家のある所ならどんな所でも幸せに感じられるようになる、ということと、牧師の二人の子供達、Alice と John Humphreys の影響を受け、エレンが聖書の教えに忠実になり、信仰の自由が保証される限り、生活環境にこだわらなくなったことが挙げられる。換言すれば、よき隣人との出会い、それに伴うヒロインの内面の変

化ということだ。もっとも、興味深いことには、Warner は作品で始めから都会をむしろ否定的にそして田舎を肯定的に描いている。例えば、第二章で描かれる都市の風景は、次の通りである。

Ellen opened the window. The rain was over; the lovely light of a fair September morning was beautifying everything it shone upon. Ellen had been accustomed to amuse herself a good deal at this window, though nothing was to be seen from it but an ugly city prospect of back walls of houses, with the yards belonging to them, and a bit of narrow street . . . they were for the most part dingy, dirty, and disagreeable,—women, children, houses, and all. . . (16)

続いて、自然描写がある。

. . . turning away her eyes, she lifted them to the bright sky above her head, and gazed into its clear depth of blue till she almost forgot that there was such a thing as a city in the world. Little white clouds were chasing across it, driven by the fresh wind that was blowing away Ellen's hair from her face, and cooling her hot cheeks. That wind could not have been long in coming from the place of woods and flowers, it was so sweet still (16).

窓から見える家々の裏側や狭い路地は (i.e. 都市)、何もかもを美しく見せている朝の陽光、晴れた空、その澄んだ青の色など (i.e. 自然) とは対照的に示される。都会的な生活様式を好んでいるはずのエレンだが、都市の風景には胸が悪くなるとされている。 (“She could not bear to look at them; she felt as if it made her sick.” 16) 注意すべきは、自然、特に天空が「神」と関連づけられており、エレンにとって折々精神的救いの役割を果たす。

そして、子供の視点から見た都市における危うさも示唆される。都市文化の象徴ともいえる百貨店のような大きな専門店が、客で混雑しており、店にいる誰もが概ね各人の用事で忙しいので、子供一人で買い物に行こうものならなかなか相手にしてくれない。相手にしても、エレンの場合同様、子供などぞんざいに扱われることが多いだろう。都市には、特に子供が単独行動を取るには様々な危険があるが、百貨店もその一例として挙げられている。

印象的なことは、物事を公平に判断するアリスですら、都会暮らししかしてこないエレンを憐れんで、田舎住まいをひいきしてみせる。アリスはエレンの年頃に珍しい石や虫の抜け殻、蝶の羽、変わった鳥の巣などを喜んで集めたものだと語り、エレンにそういった類の物が好きではないのか尋ねると、エレンは「分からない」と答える。自然に触れずに育ったと知り、“Poor Child! Then you have been shut up to brick walls and paving-stones all your life?” (163) と驚き同情してみせる。そしてすぐに、

“But now you have seen a little of the country,—don’t you think you shall like it better?” (163) と田舎の方が好ましい所だとエレンに同意を求めてみせる。勿論アリスを慕うエレンは“Oh, a great deal better!”とアリスの期待通りに答えている。(163) この返答には right か wrong かとうるさいアリスも、“Ah, that’s right. I am sure you will.”と満足気である。(163) アリス・ハンフリーはエレンの母、ジョンと並んで、ヒロインを道徳的に正しい道に導く重要キャラクターであり、敬虔なアリス自身、欠点がなく人々に愛され、エレンも見習ったらよいような模範的な人物として描かれている。そのアリスをして「田舎の方が都会より良い」と語らせることは作品全体の声明ととれなくもない。作品に出てくる数々の教訓、特にキリスト教の理念は Warner が正しいと信じて書いているものだ。それならば、都会派だった Warner の「田舎」を肯定する態度に偽りはないのだろうか？田舎志向になったエレンの変化は Warner の変化を反映するものなのか？

伝記的事実を見ると、作者の都会の受けとめ方への変化は確かに伺える。*The Wide, Wide World* が出版される頃の逸話に、Warner がニューヨークにある出版社の社長、Putnam 氏の自宅に招かれた際、招く側と招かれる側の間に大きな社会的地位の開きがあり、きまりの悪い思いをしたということがある。⁸ そのちょうど約10年前にWarner一家は破産のため社交界から姿を消し、以後食べていくのにやっとで、ニューヨークに出かけることはおろか、社交界の片鱗を覗くことすらめったになかった。従って、Warner が Putnam 宅で、自分がどれ程野暮に見えるか身にしみて感じたのである。いたたまれなくなった Warner は予定より早く帰ることにした。そこで育ち、愛着を感じていた都市ではあったが、一度経済競争に敗れた者にはもはや住みよい所ではなくなる。勿論、都市での生活レベルは上から下まで幅広いので、レベルを下げることで居所を確保できはするが、一度、「お上品な」生活を味わった者にとって、都市に残るのは物質的にも精神的にもつらいことであろう。⁹ 都市生活・文化の享受ができるか否かは、経済力の有無にかかっているわけで、父破産から *The Wide, Wide World* が書かれる10年間に、おそらく Warner はこの冷厳な事実を身を以て学ぶに至り、初めて自分が受け入れていた価値観を見直さざるをえなくなったのではないか。そのことが田舎の評価に直ちにつながるとは断言できないが、少なくとも作品に見られる田舎をめぐる Warner の変化を説明できるといえよう。即ち、「都会」という価値観を絶対視しなくなったということ、又、代替の価値観として「田舎」をある程度容認するようになったということだ。

ある程度といったのには訳がある。現在入手できる Feminist Press からでている *The Wide, Wide World* のテキストには、未発表の一章が付いてくるのだが、この一章を読むと Warner の都市生活への未練が窺えるからである。同様な指摘は Jane Tompkins が同書の後書きで記しているので詳細は省くが、¹⁰ 主要な点を挙げると、エレンが成人してアメリカに帰国したところから始まる物語の続編にあたるこの章では、John の妻となったエレンは “one of our pleasantest, though not one of our largest cities” (571) と、アメリカの都市の一つにやって来たとされている。新しい家は、Carra-

Carra 村にいた時の牧師館を再現したかのようで、なつかしい家具、調度品が運び込まれている。家の中は美しく、行き届いており、理想的になっている。エレンは個室を与えられ、家計を任される。家の内装を前と同じにしたこと、そして、エレンはもとより、牧師、ジョン、お手伝い、猫といったなじみの顔ぶれが揃ったことで、田舎にいた時ハンフリー家に見出された現世の樂園的世界が、都市においても再現されている。換言すれば、仙人達のようなハンフリー一家が到来すれば都市にも理想郷は創り出しうるし、そこにエレンを住まわせることで、作者は再び都会に住んでかつての生活を取り戻したい、という自分の叶わなかった夢を叶えたとみることができる。

この未発表の章を読む限り、結局 Warner は田舎を否定はしなかったが、生涯受け入れられなかったのではないだろうかと思わせる。公にはエレンの様に己の道徳的欠点を克服し、アメリカであろうとヨーロッパであろうとどこにいても「正しい」神の僕としての道を歩むよう、作者は *The Wide, Wide World* で説いているように思われるが、先のような点を考慮すると、Warner の世俗的な欲求を捨てきれなかった部分が浮かび上がってくるといえる。確かに、*The Wide, Wide World* を書いた時点で作者は 20 代の終わりであり、悟りを開くには未だ若いともいえよう。もっとも、恐慌の起こる前年の 1836 年に、父が家の近くにあった Mercer Street Presbyterian Church という長老派の教会に入信した際、生涯影響を与えることになる Skinner 牧師と出会い、Warner 姉妹も信仰に熱意を持って身を捧げるようになる。信仰は一家が経済的に没落した後も、個人の存在意義を見出させてくれるかけがえのない精神的な支えであった。¹¹ そして牧師の説く福音主義は、聖書を学び、神の御心を理解し、神の意志に従うことを要求した。同時に、信仰は一日にしてならず、人は一生かけてクリスチャンになるのだと考えた。この意味では、若い Warner もエレンのように立派なクリスチャンになることを目指して内心苦戦していたと思われる。エレンのクリスチャンへの旅路は Warner 自身のクリスチャンへの旅路でもあったろう。というのは、今まで触れてきたような都会から田舎へ、そして都会へという志向の揺れ、特に未発表原稿が示すあまりにも出来すぎの結末が、現世的欲求を克服し神の道に生きようとしながらも内なる欲求に勝てないという作者自身の葛藤を垣間見せてしまうからだ。¹²

II

未発表部分を除いても、作者の俗人が聖人を目指そうとする葛藤は作品にも表れているように思う。それは、田舎が良いと言いながらも、おそらく本当は自分の主張を 100% 肯定していないような無意識のなせる技かもしれない。その結果、作品の中でどこか無理が生じ、歪みが表れるように思われるのだ。その歪みは、作中描かれる「家庭」に観察されるといえる。

作品には、疑似家族は多数出てくるが、両親と子供がいて、平穏で愛情に満ちた家庭はほとんど描かれぬ。家庭にはいつも誰か、或いは何かが欠けているのだ。

主要な登場人物を見てみよう。例えば、Montgomery 家では母親の生前にも、父親の存在感は薄い。母娘の仲が非常に親密だけに、父の娘への愛情の希薄さが目立つ。最終的には父も亡くなり、Montgomery 一家自体はエレンが子供のうちに消滅してしまうといえる。Fortune 伯母に関しては、母親も生きており、結局 Van Brunt 氏と家庭を構えるが、この結婚は愛情に基づくというよりは農場の経営が絡む文字通りビジネスライクな契約である。Marshman家では、大勢の登場人物が現れ、クリスマスや新年といった家族ぐるみの行事が描かれるが、ここでは風俗並びにエレンの精神的成長を描くために場を設けた感が強く、主人 Marshman 氏と娘達、孫娘には光が照てられるが、娘達の夫は陰薄く、人は数多いが家庭という印象があまり残らない。山の上に住み、皆に尊敬されアリスも頼る理想的とされる女性、Mrs.Vawseは、身内は孫ナンシーのみがいるが特別親密ではなく、独立した個といえよう。そして、Lindsay 家では、夫妻がエレンを養女に迎え、祖母も交えて家庭らしい家庭を築くかと思いきや、義母はエレンをさして好かず、祖母・義父は彼女を溺愛する。健全な家庭とは決していえないのである。

こうしてみると、唯一理想的な家庭はハンフリー家に見出される。正確に言えば、エレンがジョンと結婚して築く家庭にその理想的姿が実現することが期待されるのである。というのは、始めに一家が登場する段階でハンフリー夫人（母）は亡く、聖職に就くべく勉学中のジョンは不在である。そしてアリスも病死し、ジョンが戻り、一家に引き取られたエレンがアリスの代理を物理的・精神的に果たせるようになる頃、エレンも又親類のいるスコットランドへ去らなくてはならない。エレンが成人してジョン達の下に帰る時、ようやく家庭が成立するのである。だが、この家庭も何か不自然なものを感じさせるのだ。何故ならエレンとジョンの関係は年齢の差もあるが、子供—保護者のそれであり、作品最終章、並びに、未発表の章を読んでも、二人の関係は対等になるどころか、依然妻—夫の名を借りた子供—保護者の主従関係とみなせる。例をあげれば、エレンは結婚した後も、何かささいなことを決める時にすらジョンの指示を待つのだ。再会の喜びに加え、エレンがジョンの妻になったと知り感涙にむせぶお手伝いの Margery の気持ちを鎮めたく後を追う時ですら次の通りだ。“[Margery] threw her apron over her face and hurried off to her own premises; whither Ellen after one look at John immediately followed her” (573). 金銭管理を任されるにあたって、分からない、解決できないことはそれまで通りジョンに助けてもらうことにする。二人の次の会話がその関係を決定的に示しているといえよう。

“... you will help me out when I am in a puzzle.”

“Do you get into puzzles, still?” said he smiling.

“Not exactly a puzzle, perhaps—or if I do I commonly work it out—but I often launch out upon a sea where *I dare not trust my own navigation*, and am fain to lower sail and come humbly back to the shore; but now I will take the *pilot* along,” she said

joyously,—“and sail every whither.” (577)(イタリックは筆者)

エレンはもはや人生の舵を自分でとらないのである。

エレンはジョンに出会う前の少女時代、独立心旺盛な勇気ある子供だった。例えば、体の具合が悪く買い物に行けず困っている母の代わりに、自分が一人で店に行き見本をもらってくることを提案し、それを実行する。店では誰にも声をかけられず、困って泣き出しそうになるがこらえる。更には、店員に嫌がらせをされるが、親切な人の助けを借り何とか目的を達する、とその年頃の未経験な子供にしては出来た振る舞いをする。伯母の元を訪れる時も、見知らぬ町に一人放り出され、迎えもいず困惑するが、途方にくれたり、泣き出す一方ではなく、どうにか目的地に着くよう行動する。

しかしながらジョンと出会い、彼を師として敬慕するようになってからは、そうした気質もあまり見られなくなってしまった。Van Brunt氏が怪我した折、エレンは馬に乗り近くの町まで一人で医者を探しに出かけたが、帰り道エレンに恨みを抱く男に乱暴されかける。その現場にジョンが通りあわせエレンを助けたこともあり、ジョンから一人で馬に乗り外出しないようにと厳しく言い渡されてしまう。以後、エレンは本当に受動的なジョンの僕ようになってしまう。言い換えれば、彼女はジョンのつくりあげる通りの人物になっていくのだ。これは似たところでは、例えば『源氏物語』で源氏が紫の君を自分好みの女性に育て上げていく関係を思い起こさせるが、ここで決定的に違うことは、エレンは単にジョンを愛しているからではなく、彼が神の声を代弁しているのでジョンに絶対的に従っているということである。結果、エレンはどんどん模範的なクリスチャンになっていく。スコットランドで祖母や義母達があの子は宗教に心を煩わせすぎる、子供らしく他の子供達と交わらないと不満を述べ、少女の表情が明るくないことを嘆くのである。確かに、ヨーロッパに来てからは、“grave”という、ジョンの表情・振る舞いを特徴づける形容詞がエレンにも使われ始める。実際、ジョンは久しぶりにエディンバラで会ったエレンが、そういった落ちついた表情をたたえているのをそっと見て大変満足する。

The expression of her face touched and pleased [John] greatly; it was precisely what he wished to see. Without having the least shadow of sorrow upon it, there was in all its lines that singular mixture of gravity and sweetness that is never seen but where religion and discipline have done their work well; the writing of the wisdom that looks soberly, and the love that looks kindly, on all things (559).

そもそもアリスやジョン達は、作品に現れた時からいつも上品で、完璧な英語を話し、行いも正しくと他者から浮いた感じを与える。それはエレンがどんなに不平を言ってこぼしても、動ぜずに“Pray”の一言しか言わず、神の道に従うことから絶対に外れないアリスの例が示すような堅固なキリスト教的鍛錬の賜である。¹³ 従っ

て、何があろうと己の信仰が揺るがなくなる頃、エレンも他人には“grave”と映る重厚さが身につく、アリス、ジョンと同様な人とは異なる印象を与えるようになるのだ。

しかし聖者らしくなったエレンより、子供の頃の澆刺としたエレンの方が人間的魅力に溢れていたように思われる。これも作者の無意識的意図なのかどうかは定かではないが、エレンの最大の欠点とみなされる—“passion”—激情を爆発させている頃の方が、キャラクターとしては説得力があると思われる。理不尽なことへの怒り、例えばエレンの答えたくない問いに、何かなんでも答えろと言う意地悪な Fortune 伯母に向かって “Stop! Stop! . . . you must not speak to me so! . . . If mamma or papa were here you would not dare talk to me so.” (159) といった口答えなぞ、実に胸のすく活躍ぶりともいえまいか。もっとも、この作品は教訓書であり、子供が逆境で怒るばかりで何の解決法も示さないのでは、本来の役目を果たさなくなってしまう。そこで、エレンはクリスチャンにならなくてはいけないのだが、それにしても彼女は子供なのにあまりに宗教がかってしまったのではないだろうか。

更にエレンとジョンの結婚に非を打つならば、Donna M. Campbell も指摘しているように、これは近親相姦の感が否めないことが挙げられよう。¹⁴ エレンとジョンは設定上いちおう義兄妹ということになっている。お互いを “brother” “sister” と呼び合い、相手のことをそのようにみなす。だが、初めの出会いには注目したい。

“Then if I am to be your brother you must give me a brother’s right, you know,” said [John], drawing her gently to him, and kissing her gravely on the lips.

Probably Ellen thought there was a difference between John Humphreys and Mr. Van Brunt, or the young gentlemen of the apple-paring; for though she coloured a good deal, she made no objection and showed no displeasure (274).

エレンがジョンから挨拶のキスを唇に受けた時、Van Brunt 氏の時の様に嫌がらず、むしろひどく赤面したとあるように、ヒロインの控えめな積極性、恥じらいの感じが何かしら sensual な関係を連想させる。そして、日頃のスキンシップをはじめ、久しぶりに会った時にジョンはキスもしてくれないと不満に思うエレンの幼い恋心は義兄妹の関係がそれ以上のものになることを予期させる。そもそもアリスの弟への愛情も非常に深く、弟の不在を恋人の不在の様に悲しみ、再会している時の寄り添い方も又、恋人のそれを思わせ、二人の関係、特に姉から弟への思いも何かしら近親相姦的愛情を感じさせなくもない。

The Wide, Wide World で、とりわけ現代の読者がおそらく大変不満を覚える点は、母→アリス→ジョンという導き手の元を離れた後、スコットランドで不信心なリンゼイ家の面々に精神的試練を与えられ、それらを見事に独力で切り抜けたエレンは自己統制能力を持ち、精神的に成長した女性になったはずなのに、ジョンが現れると全権を彼に委ねてしまうことである。一度巣立ちした若鳥が又巣の中のひな鳥に

なってしまった様であり、彼女の行為は退行的にも思われる。¹⁵ 確かにエレンはクリスチャンとしては理想の姿に近づいたとみることもできるし、多くのヒロイン達が求める「結婚」という望ましいゴールに到達したともいえる。そして、こうしたことは、作品の目指すところでもある。しかしながら、それはヒロインがただ信心深くなった、幸せになったというよりも、彼女の「個性」を消し、独立独歩の精神を捨てるという代償を払うことを意味するのだ。ジョンという聖職者との結婚は以上のような退行的変容を決定づけるかに思われる。ジョンは繊細で学者肌の牧師という訳ではない。馬の調教が得意であったり、肉体的に逞しく、エレンを乱暴者から救う場面では、腕っ節の強さも証明している。しかも“gunpowder”とあだ名される程、内に激しさを秘めてもいる。もとよりクリスチャンとしてはエレンの厳格な師である上に、こうした文字通りの力強さを見せられると、ジョンはエレンの支配者であるという印象が一層強まる。逆に言えば、このような男性を夫・師と仰ぐエレンは立場がますます従になり、自己が消去されていくのだ。

かくしてエレンの成長ぶりやハッピーエンドに思われるエレンとジョンの結婚にも又、納得いかない点が指摘できるといえよう。19世紀半ばのアメリカにおいて、家庭とは信仰生活における基盤でもあり、女性にとって家庭を守ることは道徳・社会秩序を守ることにつながるので、重要な仕事であった。Warnerもその認識はあったはずだが、一見健全そうに思われるが実はいびつな人間関係を提示しているWarnerの筆致は、本当は彼女が「教訓的な」作家になり切れなかったことを暗示していると考えられる。いくら宗教という精神的支柱を得たとはいえど、突然の社会的失墜という苦い経験は、作者に trauma を遺したはずだ。物語を書くのは家計のため、ひいては社会的上昇を達成し、心の傷を癒すためだったろう。結果としてベストセラーを生み出したが、あくせく抹香臭い物語を書き続けるより、かつての優雅な生活を引き続き送っていたかっただ、というのがWarnerの本音ではないだろうか。そんなWarnerを「教訓小説作家」の範疇に閉じこめ、彼女の作品に「教訓小説」というレッテルを単純に貼って読むのでは、作者・作品の十分な理解は望めないのではないか。作品の「都会対田舎」といった側面に限らず、彼女の描く完結しない幾つもの家庭、不自然な結婚の形に見出される作品の歪みも又、作者の精神的苦闘の跡であり、かつ、抑圧された欲望の表象と考えられる。クリスチャンだから、或いは、教訓作家だからといって、人生において必ずしも楽ではない「正しい」道をWarnerはすんなり歩めたわけでもないだろう。そんなジレンマを作品は語らずして語ってしまっているのではないだろうか。

註

¹ James D. Hart, *The Popular Book: A History of America's Literary Taste* (New York: Oxford UP, 1950) 287; Lucy M. Freibert and Barbara A. White, eds., *Hidden Hands: An Anthology of American Women Writers, 1790-1870* (New Brunswick: Rutgers UP, 1985) 222.

- ² Edward Halsey Foster, *Susan and Anna Warner* (Boston: Twayne, 1978) 33.
- ³ 佐藤 宏子『アメリカの家庭小説：十九世紀の女性作家たち』（研究社、1987年）58-69頁。及び、Jane Tompkins, *Sensational Designs: The Cultural Work of American Fiction 1790-1860* (New York: Oxford UP, 1985) Chapter VI 参照のこと。
- ⁴ これは本文の142頁を参照されたい。以下同作品からの引用はすべて次の版によるものとし、括弧内に頁数のみ記す。Susan Warner, *The Wide, Wide World* (1850; New York: Feminist P, 1987)
- ⁵ Foster 41-2.
- ⁶ Foster 55.
- ⁷ Foster 43.
- ⁸ Foster 55.
- ⁹ Nina Baym, *Woman's Fiction: A Guide to Novels by and about Women in America 1820-70*, 2nd ed. (Urbana and Chicago: U of Illinois P, 1993) 46-7. Warner の階級意識については、Baym の次の分析が該当すると思われる。“The women authors responded to the class system with similar ambivalence. None of them thought to deny that a class system existed in America, and not all of them regretted it. All agreed that the class system presently existing was based entirely on money . . . and most of them argued for a class system based on merit” (46). “They tended to focus . . . on the class-within-a-class, the meritorious who might be singled out from the merely wealthy by their psychological freedom from money, their devotion to gracious living and virtue rather than to acquisition and display” (46-7).
- ¹⁰ Jane Tompkins, afterword, *The Wide, Wide World* 586-592.
- ¹¹ Foster 22.
- ¹² Warner は世俗的な人物で、そのような面が *The Wide, Wide World* の草稿段階では見られたが、（特に女性）読者の強い期待、要望を受け、作品は教訓調に仕上がったという興味深い指摘もある。以下参照。Susan S. Williams, “Widening the World: Susan Warner, Her Readers, and the Assumption of Authorship,” *American Quarterly* 42 (1990): 565-586.
- ¹³ 同様な点については、Jane Tompkins が *Sensational Designs* で述べている。pp. 177-8 参照のこと。
- ¹⁴ Donna M. Campbell, “Sentimental Conventions and Self-Protection: *Little Women* and *The Wide, Wide World*” *Legacy* 11 (1994): 124-5.
- ¹⁵ この点に関しては、Grace Ann Hovet 並びに Theodore R. Hovet は心理学的な後退であると指摘している。“Identity Development in Susan Warner’s *The Wide, Wide World*: Relationship, Performance and Construction” *Legacy* 8 (1991): 12.